

風雪202年を支えた本物志向

企業の寿命30年説が唱えられたのも今は昔。最近では設立から10年で、その約9割が退場していくともいわれ、大企業の経営破綻も珍しいことではない。今や企業の寿命は20年説や10年説に短縮されそうな状況だ。

それだけに100年、200年の歴史を積み重ねている老舗企業の経営の継続力は、驚異でもある。今回から新シリーズとして、実在する老舗企業を題材に事業継承の極意を解説してみた。



今回、題材として取り上げるのは岩手県陸前高田市に本社を置く創業202年の「八木澤商店」。1807(文化4)年に造り酒屋として創業し、紆余曲折を経ながらもしょうゆ、みそのメーカーとして現在に至っている。

7代目の河野通義氏(2008年死去、当時会長)からバトンを

受けた8代目の河野和義氏(65)が現在、社長を務める。河野社長は伝統を受け継ぎながらも、時代とともに変わってしまった部分に疑問を感じ、温故知新の精神を発揮し、あえて古式製法にこだわる一方で、まったく新しい取り組みの必要性も

事業継承の極意

痛感。蔵元でありながら野菜作りに挑戦したりと、試行錯誤の中で8代目経営者として全力を尽くしている。



老舗の風格を醸し出す八木澤商店の店舗 一岩手県陸前高田市

いまの・せいいち 日本リクルートセンター(現リクルート)、リクルートコスモス(現コスモスイニシア)を経て1998年組織人事コンサルティング会社「マングローブ」設立。著書に『マングローブが教えてくれた働き方』(P-VineBOOKs)。

マングローブ 代表取締役社長 今野誠一

首尾一貫しているのは、本物へのこだわり、そして本物を追求する心を育てるという姿勢だ。

その努力が実を結び、「醤油の日」の10月1日に行われた全国醤油品評会(日本醤油協会主催)では、同社の「こいくちしょうゆ『やません』」が、見事に最優秀賞にあたる農林水産大臣賞を受賞した。

65歳となった現在、後を継ぐことになる長男で専務の通洋氏に、9代目のバトンを渡しつつある最中だ。

この継承で自らが体験したときと同様の難しさを感じるとともに、時代背景の違(か)いからくるさまざまな葛藤(かつらう)にも直面している。

老舗企業の事業継承の繰り返しには、守るべきものと変えていくべきものを見極める「時代の克服」の難しさが横たわっている。

八木澤商店では202年もの間に、8代にわたるバトンリレーのドラマが展開されてきたのである。今回は、八木澤商店の7代目から9代目の3代にわたる代替わりの検証を通じ、事業をスムーズに受け継ぐためのポイントに迫る。ここから新たなビジネスチャンスや、苦境から脱する経営のヒントをつかんでいただければと思う。